特集：闇の世界と芸術（1）

意識、この目に見えぬ豊穣なる闇

作曲：ロクリアン正岡

いろいろな闇

昼間、我々は星を見ることはできない。闇ではないか。だが、太陽も見えなくするほどの明るさを持った天体が現われたとしたら太陽すら闇に沈む。これらのことを「明るすぎるが為の闇」という意味で明闇（あかやみ）と呼ぶことにしよう。暗闇の反対だ。

明闇と言えば人間の表情だ。無表情から喜怒哀楽のはっきりした表情に至るまで、表に出たいわば明闇の向こうに沈むものがどれほどあるだろうか。

闇と言えば物影もすぐに連想される。視線を遮る物という物。それは人という相手の心の中にもごろごろしている。いや、自分自身の心の中にもごろごろしている。ことごとしく先入見や固定観念と言わずとも、既知の言葉、情報、知識、諸々の思い、これらが全然なかったら大変だが、それらの為に見えなくされているもっと大事なことがどれほどあることか？

また、透明という。それは、ある遮蔽物の表面に視線がぶつかるまで邪魔する物の無い状態だといえよう。視界良好とも。だが、その空間に何もないのだろうか。透明を装う種々の物が実はあるのかもしれない。隠れているのか、いや、透明と見なす我々の方にこそ非が、咎が、罪があるのではないか。知らず知らずのうちの無視。言い訳の言葉は「想定外」か。

暗闇、明闇、物陰、透闇（とうあん）、、、、別に全部網羅しようとしたわけではないが、ことほど左様にこの世も我々も闇に満ちている。裏を返せば光に満ちている。

闇がなければ光なし。光なければ闇もなし。要は光と闇の差異や関ぎ合いあってこそのこの世であり、我々の内面、心や頭なのではないか。

“今”を挟む時間の闇、過去と未来

時間的に考えれば、とにもかくにも今、現在というのが光の差す場であり、過去や未来は土台かつ所詮、闇の領域だ。両者はどうやっても直接に知覚することはできない。心や頭の中にしても同じこと。今の場に持ち出さないことには無理だ。たとえタイムマシーンでどの時代に行けたとしても、そこが今となる、というだけのこと。そのことを音楽ほど如実に示してくれるものはないであろう。音が鳴り響くのも鳴り止むのも常に今でしかなく、過去と未来は常に無音で闇そのものだ。

いま見えている遠くの宇宙の様子は遥か過去のことであり、今現在の遠くの宇宙の様子は知る由もない。不可知である。太陽ですら見えているのは８分以上前の姿にすぎず、月だって。となると、我々はそんな遠くのものとは一緒に居ないような居るような、どっちつかずの状態にある、ということになるのではないか。空間的には全宇宙共通時刻時間としての現在に共存している筈のあらゆる天体も、人間にとっては未来の闇に隠れたままだというほかない。

あるいは、今見えている太陽の姿とか、光に照らされている身の周りのものとの現在同居性が信じられるのみか。いや、それとて怪しいものだ。たしかに、見えている光は今現在のものかもしれない。が、その映像はというと、厳密には物の影にすぎず、過去の姿ではないのか。過去の姿は優しげだ。だからアニメーションが愛され、光よりもゆっくりな音波の齎す音楽が愛好されるのか？

過去の闇に母性的な温もりを求める耳という（目よりも）内気な器官。海、子宮、地中に懐かしさを覚える人の心。　生命の地平、平和の園、お守りの力。

自転車と連れ添い歩む撫子に　時も憩うや大和の心月

（余談だが、サッカーのチーム名が「大和撫子」とは噴飯物だ。だが、慣れれば気にならなくなってしまう。この鈍化作用は人を創造性から大きく遠ざけ、おまけに「撫子」のイメージの変質も招く。要注意！）

されど、男とは未来からの烈風を顔面いっぱいに浴びて生きるものではなかったか？

真夜中を斬り裂き走る若者の　心は宇宙のビッグバン道

音楽の闇をどう使い分けるか

あらゆる音楽は時間の長さを要するものだが、表だった現象としては各瞬間しかない。そこを境目として過去と未来の二つのサイドはどちらも闇の世界だ。

それはもともと人間の意識を廻る機構がそう出来ているからだが、二つの闇の違いはいかばかりか？

音楽は各瞬間に鳴り響きつつ時間進行に従って進むしかない。音楽の場合もその根っこは過去の方にあるように見える。だからだろう。昔から作曲は「重力」を意識してか曲頭を土台に上へと組み上げて行くものとして建築に例えられることが多い。冒頭の主題が大事にされる、提示部が繰り返される、好きな曲は何度も練習するし公演もされる、カラオケでも皆が知っている曲が盛んだし、懐かしの歌謡曲という言い回しさえある。その陰で新しさを身上とする現代音楽のなんというマイナーぶり。

音楽を支えるものは、過去の闇独特の温もりであり、母の体温であり、耳の内気さであり、赤子かご老人か御病人の退行感情であり、記憶力でありそうだ。でなかったらＣＤなどの録音物もただの本番の代用品か音楽博物館の陳列物か、さもなければ警察活動の為の証拠物件等に成り下がるほかないようにも思えて来る。

だが、過去にばかり拘る者は現在が貧しくなるばかりか、何よりも未来を完全に失ってしまう。

一方、未来に関わる者は現在や過去を決して失いはしないのである。

ご来光を仰ぐように、未来から頂戴するということ

過去の思い出に浸りがちなご老人方と違い、若者は未来志向だ。若者は身体性の比重が高い。だから未来からの風を浴びたいとなれば具体的に空間移動をするしかなくなる。

確かに他者の発した声は、この大宇宙内部の同時性を信ずる限り、客観的には過去からのものと言わざるを得ない。発声の時点が受容の時点より前だからである。それこそ太陽の光、星の瞬きと同様だ。だが、受容者の主観からすれば、それは今まさに自分に飛び込んでくる未来発のものだ。「ご来光を仰ぐ」と言い、「聴従」という言葉もある。「未来から侵入して来るものを有難く頂戴する」という気持ちは“受容の魂”ではなかろうか。

こういう話だったら、やはり音楽で考えるのが一番だ。

世界初演の現代音楽を有難く拝聴する。始めの音が聞こえる前から聴き手は未来に耳を澄ませて待つ。鳴り出した後も、興味を持ち続ける限りそれが基本スタンスだ。そうしているうちに意識の中に音・音響・動き・テンポ・リズム・メロディー・ハーモニー、それに現代音楽独特の曰く言い難い要素も加わった“音楽”が生まれ生長して行ったり、はたまた別のものに成り変わったりする。だが、それは音源からそのままのものが飛び込んでくるのではない(物理的には単なる空気の粗密波だ)。だから、音楽など、失礼な話、犬の耳にどう響いていることか。音楽鑑賞などやったこともないような人に現代音楽がどう響いているか、考えただけでもぞっとしてしまう。いずれにしても、各自の内側でしか鳴り響くことの無い音楽は、他者にとっては丸ごと闇、開けようもないブラックボックスだというほかない。

まあ、それはそれとして本人にとってはどうなのか。いうまでもなく、音楽とは表だった現象としては「今、まさに鳴り響くもの」かもしれない。移ろいの一コマ一コマとも。しかし、それでは赤子の音遊び以下だ。一曲の全体とは言わずとも、音楽の実体らしいものすら無いことになってしまう。ある種の音楽で植物の生長が促進されたとか牛の乳の出が良くなったなどといっても、そもそも、音楽を聴く彼女らなどそこに存在しているだろうか。

音楽の全体が、この考察を経て闇に沈んだ。人の内と外のほんの一瞬の音響的接点を除いて。だが、別に音楽家や愛好家でなくとも人間ならば何時でも全曲口ずさめる曲をいくつかお持ちだろう。頭の中に曲の始めから最後まで同時に内蔵されているわけだが、具体的に音にするには何十秒かの時間が必要だ。このように時間を要するものが瞬間に内蔵されているということは実に不思議なことだと言わねばならない。というのも、物理的に言えば人は他の諸物体と同じように車に簡単に壊されうる一瞬一瞬の身体的存在事物に過ぎない。それなのに人間は時間というものを自分の一部を取り外すように外へ出すことができるのだ（科学が躍起になっても、脳の中にＣＤのソフトとハードのワンセットなど見つけ得ないだろう）。そして、それのプロこそが音楽家、わけても作曲家なのであろう。勿論、楽譜に時間はない。そもそも時間なんて目に見えるものではない。それ自体が闇だ。

作曲の真髄は、時間という闇との攻防に生きることか

人間は色々な意味で時間に支配されている。作曲家も例外ではない。しかし作曲の仕事は音よりもまず時間を相手取り支配し返す仕事なのだ。音楽にとって時間は、

そこに音を上乗せすればよい単なるカンバスではない。どのような動きも変化もテンポも載せられる**平均的な時間**―この平板なるノッペラボウ―というものは物理的に抽象されたものだ。物理学は、生命体から生命を取り去ったようなものが物質だ、といった考え方をしているだろう。それはそれで構わないとして、だからといって、生命体は元々ある物質に生命が後から付け加わったもの、というのは不味い（人造人間、アンドロイドはアメーバほどの尊厳も神秘性もない）。音楽も一種の生き物だ。それは平均的時間などという非生命的なものとは無縁なのだ。それらはそれぞれ独特のテンポ（速さ、遅さ）を生きる。ましてや人間は生命以上の生命だ。そこには如何に周波数レンジの広い無限のテンポが内臓されていることか！人間の持つ演技力や演技欲―その程度や能力は人によって様々だが―とは、自分自身に内蔵される様々なテンポを使い回す“上なる自分”のものではないか。いやしくも芸術の場合はそうであるように思われる。

人間一人一人の自分にとっての“上なる自分”という闇

次は、2011 年の賀状の全文である

人間の皆さま、お元気でしょうか？

お互いたまたま人間に生まれ人間をやりそして退いて行くわけですが、人間という役柄よりもそれを演じきる役者の方がより切実なわけであります。

各々方自身にとってすら透明なこの役者こそ“不可知の何様”（≒全一者）の一細胞といえるものでありまして、私の楽曲はその目に見えない「何様」からの信号を可聴体に置き換える為のシステムであります。

役柄の人生にはいろいろありますが、役者の方は生死を超越しているがゆえに泰然自若！　今年も透明度の高い作品を発表して参ります。

上なる自分からは下なる自分を見下ろせる。見渡せるといってもよいだろう。だが、下の自分が上の自分から見られたり従うことは出来ても対象化することは難しい。ましてやその存在に気づいてもいないとなると、土台、闇だというほかはない。自分の中にもある天井のようなバカの壁！

上なる闇へのセンサーを働かそう

天井も屋根も取り去って―いささか寒いが―遠来の星の瞬きのごとく未来からやって来る上なる情報に耳を澄ます。そこには大いなるものからの叡智＝真に美味しい情報が詰まっているのだから。何かが聞こえ出したら作曲は旨く行く。

図版にある「ロクリアン正岡作品集・Ⅲ」（絵画は「異星人の為の楽譜―死と重力」/　*作品集Ⅴの絵画をバッハじゃないが１８０度回転させている*）には私のカンバスコンサート時代の作品が満載だ。その中に恒松正敏氏の絵画「百物語」から特徴ある４枚を選び音楽に翻訳した「闇の明察」という組曲―*各曲名は、「観音の瞬き」「自我の化身」「異形の遊女」「冥界の祭り」。方々の図書館にあるので試聴可能*―がある。

『ロクリアン正岡作品集・Ⅲ』のＣＤカラージャケット

ある画塾の老教師を招いて自由な照合を促したところ、簡単に当ててしまいお互い得心したものだ。勿論、表面的な類似によるものではない。同様に、ご存じＥＳＰカード（正円、正方形、十文字、星型、波打つ川文様）の５枚の画像を５曲からなる組曲に翻訳したことがあったが、これも聴き手の中の若いピアニストがずばりと言い当てもした。確率から言えば１２０分の１という難しさなのだが、どうしてそういうことが可能なのか。私は勿論、音楽に翻訳されるべき対象を知っているし目の前に据えてすらいた。だが、もしそれを図面的に、あるいは概念的に捉えるばかりだったら、音楽の美は損なわれ、所詮、音楽には成るまい。

結論から言うと、目の前に置かれた絵画や図になり切ろうとしていると、暗い夜空から星の光が届いて来るように、存在からの波動が私に及び自身上昇して行くような変化が生じるのである。

複雑な絵画からイデアそのもののごとき単純な図形まで、存在そのもの（に与ること）によって一上からだが一支えられているということは驚くべきことだ。しかし、表象の中でも芸術の領域に入る物に於いては、存在そのものによる上からの支えを受けているということ、換言すれば、全的なものの頂点からの光に照らされてている、ということがことのほか大切なのであろう。その輝きの度合こそが、芸術における美の高さというも量というも、そういうものを決定する、と言い切って良いのかもしれない。

今に始まったことではないが、作品分析とかいって賢しらな行為が繰り返され、論考が繰り広げられている。大抵は、形式と内容に分け、その照応という方法がとられる。それを人間に適用すれば、身体と精神、体と心の照応ということになるだろうが、そんなことでは一番大切なことは説明できないのである。

今、私は無知という闇について言及しているのだが、一番大切なこととは存在事物の“存在”ということである。目の前に楽譜が置かれている。上記のような方法で分析し、それで研究論文を書いたり講座を開いたりできよう。発信側も受容者もお互い分かり得たような気分になるのが普通だ。経済活動にもなり、そのほかいろいろ役立つこともあろう。だが、その作品の存在は、形式と内容に分けられる刹那にどこかへ飛び去ってしまっているのだ。存在は味わい感動するもの。その音楽を受容しその音楽になり切り、自分ごと輝くこと（自分がそこに含まれていない物に美を覚えるとはあまりに空しくないか）。もし、作曲家が創作時に上なる波動に与っている楽曲によるものなら、そして演奏がそれに応えるものであるならば、その

ような音楽受容・鑑賞の可能性は与えられている。あとはその人の資質や聴く姿勢の問題だ。要領と言えば、自己を空しく透闇状態にして、と言うところかと思われる。

茶室に憩う貞淑な幽女

『ロクリアン正岡作品集・V』のCDカラージャケット

これは二つ目の図の自筆画の名称である。この主人公は、大宇宙を極限まで凝縮したような小さな空間に幽閉され切っているようでいて、宇宙を超越した空（くう）の化身でそこから戻って来た使者＝生死超越体とも言える。其は存在忘却の方々の耳にそっと語りかける。「あなた、お寂しいでしょう。戻って来たわ！」と。其は恨みも怨念もない幽霊。それは透闇な心の持ち主ゆえに、万物に浸透している存在そのもの、この最も気づかれ難いものの息吹を伝えてくれる。

意識というものは、この世の生とそれを超越した永遠の生の境地＝存在そのものの地平に於ける境地を繋ぐ柱のようなものだ。下なる自分の意識を未来に開けば、上なる自分からの意識に出会えるものらしい。意識は物を照らす光であるかもしれないが、意識そのものは甚だ対象化しがたく、それを見ようとするとたちまち闇と化するもののようだ。そのことを一番痛感しているのは意識を使いまくる科学者であろうが、音楽家、わけても作曲家は闇へのセンサーに恵まれているものと思われてならない。作曲に専念すればするほどその闇に鋭敏になる近頃の私の体験を信じる限り……。

2.1.20　　（ろくりあん・まさおか　本会作曲部員）

【ロクリアン正岡プロフィール】

未来、ということを強調したので、ここでは私の近未来について紹介させて頂こう。本文では図や絵の音楽表象への置き換えについて語ったが、ここへ来て、モデルは狛犬、ライオン（来音）へと変わった。狛犬が3月8日夜、杉並公会堂小ホール（日本作曲家協議会のアンデパンダン展）、ライオンが5月10日夜、トリフォニー小ホール（日本音楽舞踊会議、作曲部会公演）。図や絵画は人の業。だが、ライオンは天然の業によるもの。人類も同様であり、図や絵のような人工物と比べようもないほどその根は—過去ではなく—無限の彼方＝遠き闇の奥にある。音楽ほど自然・天然的成分の多い芸術は他にあるまい。どうか“作曲者の闇へのセンサーの働き”にご注目頂きたい。

（HPは　http://www.saturn.dti.ne.jp/locrian/）